

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第40回

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

物に寄せて思を陳べたる歌（巻第十一 二七五四番歌）

朝柏閨八川辺の小竹の芽の

思ひて寝れば夢に見えけり

久しぶりに夢を見た。それまではあまりに疲れて、いつ寝たのかも記憶がない日ばかり続いていた。が、その夜は風が強く寝付けなかった。カーテンを少し開けると満開の桜から花びらが飛び散っていた。暗闇の中、見えない大きな手が可憐な桜を掻きむしっているかのように胸騒ぎがした。案の定、恐ろしい夢を見た。次の日は、しとしと降る雨だった。また夢を見た。今度は隣の家のベランダに勝手に干し物をして、謝っている不甲斐ない私がいいた。夢は訳が分からない。どうやら桜から出る魔法の粉にすっかりやられたらしい。今日はとても穏やかだった。川辺の散歩に丁度いい。公園に出ると木漏れ日の中はらはらと舞う花びらを見た。赤いスカートの幼子がそれをつかまえようと両手を伸ばしてくるくと回っている。夢現……あれは娘か、それとも幼い日の自分だろうか。今日あたり見るなら心が柔らかくなるような夢がみたいなどと独り言ちて歩いた。花びら一枚、おまじないにポケットに忍ばせた。

閨八川は所在未詳だが、静岡県富士市を流れる潤井川かという説もある。

その枕詞である柏の葉は大きく、物を包んだり飯を盛ったり器の代用として昔から使われていて、万葉集にも四首詠まれている。「朝の柏の葉は」「濡れてうるおっている」「または、「うるわしい」ことから閨八川にかかるとさわれている。朝の柏がうるおう閨八川縁の小竹の芽のように、あなたを偲んで想って寝たから夢に見えたことだった。好きな人を夢にみて起きた朝はなんと幸せで、なんとせつない朝だろう。夢なら誰にも邪魔されず、まっすぐに想う方のところへ行ける。夢で行ったり来たりもできる。

これを「夢の直路」「夢通ひ」と言った。手紙、電話、メールと通信手段はあふれていてもやはり違いたい想いは昔も今もそう変わらないと思える。桜の花びら、朝柏に閨八川の小竹の芽、風に露に、愛しさは増していく。

写真は、富士市本市場新田の潤井川橋のたもたら上流を見た風景である。脇には水害から地域を守る水防工法の一つ「川倉」の実物と説明があった。先人の知恵は人々がこの川とふれあい、共に生きてきたことをしみじみと感じさせてくれた。

今宵あなたは何を思っただろう。そして、誰の夢を見るのだろうか。「夢の通ひ」のありますように。

